キリスト教葬制文化を

“大衆に根付かせたい”

広田信也（ブレス・ユア・ホーム代表取締役・牧師）

クリスチャン人口比より多いキリスト教式葬儀

年間死亡者数140万人、毎日4千人近い人が亡くなる日本において、キリスト教葬儀の比率は2%弱と言われている。しかし、この数字は、クリスチャンの人口比率よりかなり高い。

様々な理由が考えられるが、昨今の仏教葬儀文化衰退の中、日本人が長年、キリスト教教育や福祉、あるいはキリスト教式結婚式に触れてきていることを考えると、この数字でも少ないのかもしれない。

当社では、想定していない未信者からの葬儀依頼が舞い込んだことにより、3年ほど前に、教会を離れた信者や未信者がインターネットからキリスト教葬儀を依頼できるように設定した。

徐々に依頼や問い合わせが増えてきたが、当社の働きが引き金になったのか、キリスト教葬儀社ではない一般の葬儀社が、同じようにキリスト教葬儀の広告をインターネット上に掲載するようになったのである。

一般葬儀社から牧師派遣の要請

全国に7千もある葬儀社が生き残りをかけて新しい顧客を獲得しようとしているのだろう。最近は、牧師連携の手薄な一般の葬儀社から、当社に牧師派遣の要請が入るようになってきた。

一般の大手葬儀社では宗教者に対する謝礼金額が決まっているところが多く、葬儀後に、謝礼の一部を僧侶派遣会社や葬儀社に返納するように求められることがある。一般の僧侶はそのような仕組みの中で務めを果たしているらしく、牧師にも同じように要求されることがある。

また、そのような依頼では、葬儀内容についての要求が厳しく、遺族に対して失礼がないように万全の備えをすることが求められる。

現在のところ、キリスト教葬儀件数は非常に少ないため、一般の葬儀社では、式の進行を牧師に一任することも多いが、今後、件数の増加に伴い、式内容にまで制限が入り、遺族に寄り添うことも難しくなる可能性がある。

ブライダル宣教が結婚式場やホテルの介入によりうまく進んでいない現状の二の舞が見えてくるのである。

通常、教会に所属していると、葬儀においては、昔から馴染みのキリスト教葬儀社と教会によって執り行われる。牧師や教会員にとっては親しみのある心のこもった葬儀であることには違いない。

「キリスト教風」葬儀が広がる可能性

しかし、教会を離れたところでは、未信者の企業努力により、葬儀式の品質向上、コスト低下、さらに遺族に配慮した様々な手法が生みだされ、葬儀式全体レベルの底上げが続いているのである。今後、キリスト教葬儀においても同じことが起こってくるだろう。

そうなると、キリスト教葬儀比率が上がった折には、教会での葬儀とは全く異なるキリスト教風の葬儀がまかり通っている可能性がある。アルバイトの英語教師がキリスト教式結婚式の司式をしていると聞くが、葬儀でも同じようなことが起こるかもしれない。

このような事態を避け、クリスチャンによる心のこもったキリスト教葬儀、埋葬を普及させ、正しいキリスト教葬制文化を育成し、多くの日本人に福音を伝えていくために私たちは何をすればいいのだろう。

一般業者と同じ土俵で信仰に根ざし良質な葬儀を

まず、当然のことだが、教会が主導するキリスト教葬儀式、納骨式、記念会を未信者に向けて提供する必要がある。生き残りをかけて企業努力を続ける一般の葬儀社と同じ土俵で、信仰に根差した品質の高いものを作り上げる必要がある。

さらに、それらの働きが実を結ぶためには、生前からそれぞれの家庭に出向いて寄り添い、召された後も、わたって遺族を支え続ける仕組みが全国規模で必要なのである。まさに、キリスト教葬制文化を大衆に根付かせる働きが求められている。

キリスト教会の中にはそのような働きに秀でている者は少なくない。しかし、残念ながら、教会連携によって、このような働きを全国規模に展開する組織力を持ち合わせていない。

どのような働きをすれば、上記のような仕組みを構築できるのか、それを常に模索し続け、使いやすい道具になることが当社の役割だと考えている。今後の歩みに、主の導きが豊かに備えられることを祈りつつ…。